

忍 SHINOBI

2005(平成17)年9月18日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★★



監督＝下山天／原作＝山田風太郎／主題歌＝浜崎あゆみ／出演＝仲間由紀恵／オダギリジョー／椎名桔平／黒谷友香／沢尻エリカ／坂口拓／伊藤俊／リリィ／木下ほうか／三好健児／虎牙光輝／升毅／寺田稔／石橋蓮司／北村和夫／松重豊／永澤俊矢（松竹配給／2005年日本映画／101分）

第3章

映画館の暗闇で人間観察

……日本ではじめての「個人向け映画ファンド」を実施したのがこの映画。大枚20万円の投資家としても注目だが、映画評論家としても五重丸！ すばらしい原作だが、下手をするとマンガ的になってしまう危険もあるもの……。しかしこの映画は、そのストーリー性においても美しさにおいても見事に山田風太郎の世界を映像化！ 甲賀6名、伊賀6名と家康チーム4名という登場人物の個性を明確に位置づけたうえで、そのデスマッチの面白さを堪能。そして、「愛し合う運命」にあった甲賀ロミオと伊賀ジュリエットが「殺し合う宿命」に至る構図もバッチリ！ 『忍』は JAPAN 発、最高のエンタメ素材であることを再確認し世界に発信しよう……。こう書いた直後、ハリウッドでのリメイクが決定したとのニュースが駆けめぐったが……？

『忍びの者』の2つの方向性……？

私見では、1960年代はじめ、「忍び」には2つの方向性があった。その1つは、村山知義原作の小説で、忍者ものに強烈なリアリズムと社会性を持たせたもの。市川雷蔵主演の『忍びの者』シリーズは、1962年の第1作以降計8本もつくられて大ヒットした。また、品川隆二主演のテレビドラマも大ヒットで、私はいつも観ていたものだ。

そしてもう1つが、1958年に発表された山田風太郎原作の『甲賀忍法帖』で、その後次々と『忍法帖』シリーズが生み出された。1949年生まれの子が中学生の時に隠れ読みしていたのが、『忍法帖』シリーズの中でもっとも奇想天外かつエ

ロティックな『くノ一忍法帖』(61年)。村山原作本とは全く違う、エッチで破天荒な忍者ドラマに多くの中学生が夢中になったもの。

『くノ一』シリーズは、中島貞夫が監督し、野川由美子や緑魔子主演で映画化されたが、中学生の私はさすがに1人でこれを観に行くことはできず、悔しい思いをしたもの。この『くノ一』シリーズはその後もVシネマの世界で、『くノ一忍法帖』(91~98年)が制作されているとのことで、私もその中の数本は観えているはず。私は何せ、山田風太郎といえは「くノ一」というイメージで捉えていたが、その原点が、この映画『忍 SHINOBI』の原作となった『甲賀忍法帖』にあったことを、今あらためて再確認……。

個性豊かな12名!

『オーシャンズ11』(01年)の主要な登場人物は11名だったし、『オーシャンズ12』(04年)は12名。そしてこの『忍 SHINOBI』も12名。まずは伊賀鏝隠れの頭領のお幻(りりイ)と甲賀卍谷の頭領の甲賀弾正(寺田稔)。あとの10名は、甲賀方は甲賀ロミオの甲賀弦之介(オダギリジョー)を代表とする陽炎(黒谷友香)、室賀豹馬(升毅)、筑摩小四郎(虎牙光揮)、如月左衛門(木下ほうか/三好健児)の5名であり、伊賀方は伊賀ジュリエットの朧(仲間由紀恵)を代表とする薬師寺天膳(椎名桔平)、螢火(沢尻エリカ)、夜叉丸(坂口拓)、蓑念鬼(伊藤俊)の5名。

オールスターが登場すると映画が散漫になって面白くないのは、『オーシャンズ11』や『オーシャンズ12』で顕著だが、この『忍 SHINOBI』に限ってはそんなことはない。それは、これらの忍たちの個性がそれぞれ豊かなため。甲賀ロミオと伊賀ジュリエットは比較的まとも(?)だが、あとの10名はきわめてその個性が強いから一見してその特徴を掴むことができるはず……。

「忍」の存在価値は?

この映画には有料のパンフレットの他、「完全攻略 秘伝の書」なるリーフレットがあり、そこには「SHINOBI トリビア」として①忍の里・伊賀と甲賀とは……? ②忍を1番最初に使ったのは聖徳太子、③呼び名いろいろ、④絶体絶

命の徳川家康を救った忍たち、⑤忍には体重制限があった！ ⑥忍式健康法、⑦忍の心得 PART.1、⑧忍の心得 PART.2、⑨忍の七つ道具……ならぬ六つ道具!？ が解説されている。

さらに「忍にも暗号があった!？」として「忍いろは」も紹介されている。これらを見れば明らかなように、あるいはこれを読まなくても、日本人たちはDNA的素養として(?)、忍の役割や存在価値を知っているはず……？

忍の存在価値は、この映画の中では「忍は武器だ。したがって武器を使う人間がいなくなれば、忍の存在価値はなくなってしまう」という文脈で語られる。

たしかにその通り。小さいときからすべてを犠牲にして、忍の術を身につけることだけに集中して生きてきた忍にとって、自分のその術を買って、活用してくれる雇い主が現れなければ、意味がないことは当然。しかし、その術が必要となり、価値があるのは戦乱の時代。逆に言うと天下太平の世となり、争いがなくなれば、もはや忍の術は無用の長物となってしまうわけだ。そんな戦乱の世から太平の世へと大きく時代が変革していく中、それまで戦うことを禁ずることによって両立してきた甲賀と伊賀の忍たちは……？

この映画は、山田風太郎の独壇場とも言える忍の術の数々を楽しむとともに、時代の変革期における忍集団のあるべき姿の検討が大きなテーマ……？

「忍」は明治維新下のサムライ……？

時代の変革期においては、改革派と守旧派に分かれるのは当然……。郵政民営化法案への賛否を争点とした2005年9月11日の衆議院議員総選挙において、それはきわめて顕著となった。すべての場合、守旧派とはつまり既得権益の擁護論者のこと。既得権益のうま味にあずかっていた勢力が改革に反対し、抵抗勢力となるのは、ある意味当然のこと……？

明治維新において徳川幕府を倒したのが、薩摩、長州というかつて徳川家にいじめられた外様大名であったのは当然だが、徳川幕藩体制を倒した後、必然的にやってきたのが士族の廃止。つまりチョンマゲを結び、刀をさして、お殿さまを守っていた各地方の官僚兼自衛軍たちの首切りということだった。

長く続いた戦乱の世の中でさまざまな活躍の舞台が与えられ、たくさんの雇い

主＝スポンサーから報酬をもらっていた甲賀や伊賀の忍たちにとって、「冬の時代」とはすなわち天下太平の世。世の中に争いや殺し合いがなくなれば、殺しのプロとしての忍の出番がなくなるというわけだ。

さてそんな時代に祖父や祖母から頭領の座を引きついで、甲賀ロミオと伊賀ジュリエットのとるべき道は……？

駿府のボスたちは……？

甲賀と伊賀の忍たちを戦わせることを企画、立案したのはロシアの怪僧ラスプーチンと似たようなキャラの「黒衣の宰相」といわれた南光坊天海（石橋蓮司）、そして忍者ものに不可欠な登場人物が、服部半蔵（松重豊）と柳生宗矩（永澤俊矢）。もっともこの服部半蔵は誰もが知ってるあの服部半蔵ではなく、三代目の服部半蔵正就とのこと。

そしてこれを決裁した(?)のは、今は將軍職を2代目の秀忠に譲り、自らは大御所として駿府城に鎮座している徳川家康（北村和夫）。この映画では服部半蔵正就や柳生宗矩が活躍する場面は少なく、専ら幕僚としての任務に徹しており、甲賀5人衆と伊賀5人衆のデスマッチの引き立て役……？

4人+4人の死にザマに感心！

山田風太郎の原作は、そのあまりにも現実離れした登場人物のキャラクターや、奇想天外な各種忍法のおかげで長年映像化不可能といわれていたもの。今回それを映像化するについては当然、数々のCGやVFXの技術を活用しているが、私がそれ以上に難しかったと思うのは、複雑多岐にわたる原作のストーリーを2時間以内にまとめること。

まずバツサリと大ナタを振るったのは、原作の10名VS10名のバトルを半減したことだが、それでも個性ある5名VS5名の闘いを映像で表現するのは結構難しいはず。しかしそれがこの映画では実に見事に処理され、1人また1人とそれなりの必然性の中で殺されていく脚本は見事なもの……？ 甲賀、伊賀それぞれの戦士たちも、これだけきっちり闘いの場が与えられたうえで死んでいくのであれば本望のはず……？

大将戦の行方は……？

5人ずつの勇士の闘いといえば、柔道や剣道の団体戦みたいなものだが、この場合力の差がありすぎると強い方の副将や大将が登場しないまま試合終了となってしまうこともある。しかし趣向を凝らしたこの映画の企画ではそんな白けた結果にすることはありえず、最後は当然大将同士の決戦に。

本モノのシェイクスピア版ロミオとジュリエットでも、争うのはモンタギュー家とキャピレット家であって、ロミオとジュリエットの2人が直接対決するわけではないが、この映画での甲賀ロミオと伊賀ジュリエットは、まさにこの映画のために作られたキャッチコピーそのままに、「愛し合う運命」、そして「殺し合う宿命」……。さて、この2人の頂上対決は……？ そのあっと驚く展開に注目を……。

徳川家康のイヤらしさと人情味もタップリと……

愛し合う弦之介と隴がトコトン闘わなければならなくなったのは、徳川家康が南光坊天海、服部半蔵正就、柳生宗矩たち幕僚の意見を採用したため。

そもそも甲賀が勝つか、それとも伊賀が勝つかによって、徳川3代目のお世継ぎを竹千代（後の家光）にするかそれとも国松（後の忠長）にするかを決めるという設定自体がナンセンスなものだが、それを断ることができないのがつらいところ……？

それはまあ仕方ないとしても、代表選抜チーム（？）の5名ずつが命をかけて闘っている間に、大量の大砲、鉄砲、弓矢そして大勢の軍勢で伊賀鏝隠れの里と甲賀卍谷を焼き尽くし、そこに住む里の若者たちを殺し尽くしてしまおうという狙いはチト汚いのでは……？

もっとも村山知義原作の『忍びの者』でも、石川五右衛門の故郷である百地三太夫率いる伊賀の里は織田信長の圧倒的な火力と軍勢によって焼き尽くされ、殺し尽くされたのだから、権力者のやることはどこでも同じ……？

もっとも、映画の終盤で見せるアッと驚く隴の行動とそれを見た徳川家康の人情味に大注目……？

科学性 VS 物語性

映画でのストーリー構成やスクリーン上での表現には当然一定の科学性（合理性）が必要だが、あまりそれにこだわっているのは物語性が失われることに……？ とりわけ山田風太郎原作の『忍法帖』シリーズにおいては、その面白さのために、科学性は1歩も2歩も後退してもらわなければダメ……。

だって、そんなことにこだわっていたら、300年間も生き続けているという薬師寺天膳や幼い頃からあらゆる毒を飲み、全身が毒で作られている美女の陽炎など、すべての忍のキャラが否定されてしまうことになるから……。

そもそも伊賀ジュリエットの臍にしても、剣やその他の武術が特に優れているわけではなく、その瞳が術のポイントだが、そんなことはそもそもありえない……？ この映画を楽しむためには、まずはそういう既成概念や常識を取り払うこと。そうすれば、その物語性の面白さにグイグイと引き込まれていくはずだが……？

「ある決断」伝達のスピードは？

そういう視点からそれぞれの忍の技を楽しみ、その死闘を「小泉劇場」と同じように楽しみながら、ついに1人となってしまった臍の姿を見るとき、この後このドラマはどう展開していくのかとの期待と不安が高まってくる。折りしも伊賀鏝隠れの里と甲賀刈谷が徳川家康の圧倒的な軍事力によって破壊されようとしているときだ。

いつの時代でも軍隊組織における「命令」は絶対的なものだが、同時にいつの時代においても問題は、それをいかに正確かつ早く伝えるかということ。FAXやメールはもちろん、電話も電報もないあの時代においては、最も早く命令を伝える方法は早馬による伝令しかなかったはず……。とすれば、駿府にいる徳川家康が「ある決断」をした場合、その命令が甲賀や伊賀に届くには何日を要するのだろうか……？ 他方、事前に周到な準備を整えた圧倒的な軍事力による伊賀鏝隠れの里と甲賀刈谷の制圧には一体何日を要するのだろうか……？ まあ、こんな科学的な計算をすること自体がナンセンスかも……？

忍はJAPAN発最高のエンタメ素材！

中国映画の『HERO（英雄）』（02年）、『LOVERS（十面埋伏）』（04年）の大ヒット以降、張藝謀監督は武侠小説が大好きだったことが明らかになっている。また来る10月1日から公開される香港、中国、韓国、台湾の人気スターが登場する香港映画『セブンソード（七剣）』（05年）も武侠小説である『七剣下天山』を映画化したもの。1970年代のブルース・リーやジャッキー・チェンを中心とするカンフー映画も香港映画を代表する作品だったが、そういう視点から日本をみるとどうだろうか？

いわゆる時代劇、チャンバラはもちろん日本独特のエンターテインメント作品であることは明らかだが、その中でもとりわけ「忍」（忍び、忍者）という存在は日本特有のもので、JAPAN 発最高のエンターテインメント性を持ったもの。司馬遼太郎原作の『梟の城』を映画化した『梟の城』（99年）は、村山知義原作のリアリズム溢れる忍者ものと同じ傾向のもので、葛籠重蔵と風間五平という2人の忍者を主人公とした久々の忍者もののヒット作品だった。そもそも日本ではこの最高のエンタメ素材をまだ十分活用しきれていないはずだ。CG 技術が格段に進歩した現在、そのキャラクターや物語性において最高のエンタメ素材である「忍」にもっと注目し、この映画に続いて次々と「忍者もの」を製作してほしいと思うのだが……？

『HEAVEN』はもうひとつ……？

浜崎あゆみが歌う主題歌『HEAVEN』は予告編で何回も聴き、「側にいて、愛する人……」というサビの部分だけは覚えていたもの。そのため映画が終わって、エンドロールとともに流れてくるその曲を期待しながら聴いていたのだが、その感想は、もうひとつ……？

耳に残るいい歌ならすぐにパソコンで取り込んで練習し、自分の持ち歌にしようと思っていたのだが、その意欲はがぜん喪失……？ 目下練習中の、今井美樹が歌う、テレビドラマ『女系家族』の主題歌、『愛の詩』に集中して、これを完璧にマスターすることにしよう……。

俺も投資者！

この映画『忍 SHINOBI』は、日本ではじめての個人向け映画ファンドを実施したもの。すなわち、この映画ファンドで集めた資金が製作費などに充てられ、逆に映画上映による劇場収入とビデオ収入から利益があがれば、それが投資家に還元されるというもの。これによって、浅く広く一般個人投資家から製作費を集めることができるとともに、その投資家にはその映画への参加意識をもってもらうことを狙ったものだ。この「忍 - SHINOBI ファンド匿名組合」には、「元本60%タイプ（積極投資型）」と「元本90%タイプ（安定運用型）」があり、両者とも1口10万円から。私はこの両者に各10万円ずつ投資したため、この映画がヒットするかどうかについては、現実的で密接な利害関係がある……。したがって、私は映画評論家としてではなく映画ファンド「投資者」として、この映画は是非大ヒットしてほしいと願っているが……？

2005(平成17)年9月20日記

※本作品は産経新聞2005(平成17)年9月30日付「That's なにわのエンタメ」でも紹介しました(本書101頁に記事転載あり)。

— ミニコラム —

「死の美学」といえば……

忍者には本来「死の美学」は存在しない。どんな状況下でも生き抜いて、自己の任務をまっとうするのが忍者の義務だと教育されているはず。それにこだわるのは日本の武士。切腹などというバカげた儀式は世界中どこにも存在せず、日本だけの特殊な話。自殺した作家は芥川龍之介をはじめ数多いが、「死の美学」を貫いたのは三島由紀夫だけ。彼が陸上自衛隊東部方面総監部で割腹自殺したのは、私が司法試験勉強中の1970年11月25日。あたかもその予行演習のような映画『憂国』が、先

般28分のDVDとして甦った。これを観て言いたいのは、切腹は介錯してもらってこそその儀式だということ。それがなければ絶命するまでの苦しみは大変だし、大量の血を流し臓物をえぐり出すサマは、美学とはほど遠いグロテスクなもの。それは『日本のいちばん長い日』(67年)で観た阿南惟幾陸軍大臣の切腹も同じ。くれぐれも賢明な諸氏が、「死の美学」という美しい言葉に惑わされることのないように……。

2006(平成18)年4月19日記